

おわりに

『古今和歌集』の「…な」を一〇例、『新古今和歌集』の「…な」を二五例、『拾遺和歌集』の「…な」を一四例、「な…そ」を二三例、合計六二例を検討した。『詞花集』の「…な」「な…そ」をすませると八代集の「…な」「な…そ」を一通り検討したことになる。

昭和五〇年三月に『古今和歌集』・『新古今和歌集』の「な…そ」をみているうちに「…な」にも単なる禁止ではなく、懇願的な禁止と見たほうが深い読みになるのではないかと思つたことがあつたので今回検討した。予想通りであつた。

『御伽草子』の「…な」「な…そ」の用例をみていくうちに「な…そ」が劣勢になり、「…な」の使用が主流を占める端緒をとらえようと試みたが十分な解明に至らなかつた。今回『万葉集』（旋頭歌 一二九一）では「な…そね」と訓んでいる箇所を同一作品で『拾遺和歌集』（用例八 五六七）では「な…そ」と詠んであるのがあつた。異伝とされているが「な…そね」が「な…そ」に推移する手がかりがつかめないものかと思う。

主要な参考文献

- | | | |
|-------------|------------|-------|
| 古今集総索引 | 西下経一 滝沢貞夫編 | 明治書院 |
| 古今和歌集 | 日本古典文学大系 | 岩波書店 |
| 古今和歌集 | 新日本古典文学大系 | 岩波書店 |
| 古今和歌集 | 日本古典文学全集 | 小学館 |
| 古今和歌集 | 日本古典全書 | 朝日新聞社 |
| 土佐日記 | 日本古典文学全集 | 小学館 |
| 土佐日記 かげろふ日記 | 日本古典文学大系 | 岩波書店 |
| 和泉式部日記 更級日記 | 日本古典文学大系 | 岩波書店 |
| 万葉集 | 日本古典文学大系 | 岩波書店 |
| 新古今和歌集 | 新日本古典文学大系 | 岩波書店 |
| 新古今和歌集 | 日本古典文学大系 | 岩波書店 |
| 新古今和歌集 | 日本古典文学全集 | 小学館 |
| 新古今和歌集上下 | 新潮日本古典集成 | 新潮社 |
| 拾遺和歌集 | 新日本古典文学大系 | 岩波書店 |
| 古本説話集 | 新日本古典文学大系 | 岩波書店 |
| 今昔物語集 | 日本古典文学全集 | 小学館 |
| 今昔物語集 | 日本古典文学大系 | 岩波書店 |
| 万葉集 | 日本古典文学全集 | 小学館 |
| 大鏡 | 日本古典文学大系 | 岩波書店 |
| 大鏡新講 | 橘純一 | 武蔵野書院 |
| 大鏡 | 日本古典文学全集 | 小学館 |
| 歌論集 | 日本古典文学全集 | 小学館 |

〔平成八年十二月十日受理〕

のあるものに禁止の意を含みつつ懇ろに願ひ望む用例。

用例一〇 一〇〇九「天曆御時、大盤所の前に、鶯の巢を紅梅の枝に付けて立てられたりけるを見て 花の色は飽かず見るとも鶯のねぐらの枝に手な触れそも 一条摂政」(巻第十六 雑春)

『俊頼随脳』にこの歌を「文字の足らねばよしなき文字を添へたる歌」として、さらに「この、てななふれそもといへる、な 文字なり」と言及している。たとえ紅梅の花の色は飽き足らず美しいと思つて見るとしても、鶯がねぐらにしている枝に手をふれてはならないよ、の意。紅梅と鶯を賞美する繊細な心情が感じられる。「な…そ」は禁止を表わす。

用例一一 一〇一七「延喜十五年、齋院屏風に、霞を分けて山寺に入る人あり 思事ありてこそ行け春霞道さまたげに立ちな隠しそ紀貫之」(巻第十六 雑春)

山寺に救済を求めて参籠する道に立つ霞は仏道修行の妨げと見る歌。「道」に「山寺への道」と「仏道」を掛けている。思い悩むことがあるから山寺に行くのである。山寺の春霞よ、仏道修行の邪魔をするかのように道に立ちはだかつて隠すようなことをするな、の意。「な…そ」は禁止を表わす。

用例一二 一一一一「三百六十首の中に 秋風は吹なやぶりそ我が宿のあばら隠せる蜘蛛の巣がきを 躬恒」(巻第十六 雑春)

荒れ果てた家屋を隠す蜘蛛の巣を、さびしい秋風に吹き破るなど痛切に呼びかけた歌。秋風は吹き破らないでくれ。わが家が荒れ果てて荒廢しているのを隠している蜘蛛の巣を、の意。「な…そ」は懇願の気持ちを含めて禁止する用例である。

用例一三 一二六三「一条摂政下臈に侍ける時、承香殿女御に侍ける女に忍びて物言ひ侍けるに、さらにな訪ひそと言ひて侍ければ

契りし事ありしかばなど言ひ遣はしたりければ それならぬ事もありし忘れねと言ひし許を耳に留めけん 本院侍従」(巻第十九 雑恋)

詞書の中に「な…そ」がある。詞書は、藤原伊尹がまだ身分が低かった時、承香殿女御に仕えていた本院侍従に人目を忍んで語っていたが「決して訪ねて来るな」と言つたので、「訪ねないと約束したことがあったので」と言つてやつたところ、の意。「な…そ」の前に「さらに」がくると強い禁止表現になる。

まとめ

1「な(副詞)・連用形・そ(終助詞)」 一三例

○懇願の気持ちを含めて禁止すると解されるもの 五例

用例二・四・八・九・一二・

○禁止の意を表わすと解されるもの

用例一・三・五・六・七(詞書)・一〇・一一・一二(詞書) 八例

2 作者は、躬恒(用例一・一二)、よみ人知らず(二・三・五・六)、大伴坂上郎女(四)、伊勢(七)、柿本人麿(八・九)、一条摂政(一〇)、貫之(一一)、本院侍従(一二)である。

3 部立ては、春(用例一・二)・夏(三・四)・秋(五)・物名(六)・雑下(七・八)・雑上(九)・雑春(一〇・一一・一二)・雑恋(一三)である。雑下(七)、雑恋(一三)は詞書の用例である。

4 作者が懇願の気持ちを含めて禁止している対象は、峰の白雲(用例二)・郭公(四)・草刈る男(八)・今宵(九)・秋風(一二)である。自然の景物が四首である。

つ懇ろに願ひ望む用例である。

用例三 一一七「題知らず 鳴けや鳴け高田の山の郭公この五月雨に声な惜しみそ よみ人知らず」(巻第二 夏)

この歌の前後の歌にも「郭公」と「五月雨」が詠みこまれている。歌意は、鳴けよ鳴け、高田の山の郭公よ、五月雨の降る時に声を惜しむな。「な…そ」は禁止の意を表わす。

用例四 一二〇「郭公いたくな鳴きそひとり居て寝の寝られぬに聞けば苦しも 大伴坂上郎女」(巻第二 夏)

『万葉集』巻第八に同じ作者の歌が「大伴坂上郎女歌一首 霍公鳥痛莫鳴独居而寐乃不所宿聞者苦毛」(一四八四)とある。

一首の意は、ほととぎすよ、ひどく鳴かないでくれ、ひとり寝覚めて寝ようとしても寝られない時に鳴き声を聞くと苦しいよ。夜のほととぎすの鳴き声が、独り寝のわびしさをかきたてるという歌。作者に苦悩があるためにかかわりのあるものに対して禁止の意を含みつつ懇ろに願ひ望む「な…そ」である。

用例五 一六〇「題知らず 白露の置くつまにする女郎花あなづらはし人な手触れそ よみ人知らず」(巻第三 秋)

「つま」は「端緒。手がかり」の意と「妻」とをかける。この歌の前に同じ「女郎花」と「露」を詠んだ「女郎花にはふあたりにもつるればあやなく露や心置くらん 能宣」がある。一首の意は、白露が置く端(つま)として妻にする女郎花をああ、厄介なことになるから人は手を触れてはいけない。白露と女郎花を夫婦と見る趣向の歌。「な…そ」は禁止の意を表わす。

用例六 三六三「きちかう あだ人のまがきちかうな花植へそにほひもあへず折つくしけり」(巻第七・物名)

二句に「きちこう」を隠した物名歌である。心の変わりやすい人

の家の垣根近くに、花を植えてはならない。色美しく咲く間もなく、折り尽くしてしまうことだ、の意。「な…そ」は禁止の意を表わす。

用例七 五三四「賀茂にまうでて侍ける男の見侍て、今はな隠れそ、いとよく見てき、と言ひをこせて侍ければ そら目をぞ君はみたらし河の水浅しや深しそれは我かは 伊勢」(巻第九 雑下)

詞書の中に「な…そ」がある。賀茂神社に参詣した男が自分を見て、「今となつては、もう逃げ隠れするな。たいそうじつくり見たことだ」と言つて寄こしたので、の意。「な…そ」は禁止を表わす。

用例八 五六七「かの岡に草刈る男しかな刈りそありつ、も君が来まさむまにくさに 柿本人麿」(巻第九 雑下)

旋頭歌である。『万葉集』巻七に「此岡草刈小子勿然苟有乍公来坐御馬草為」(二二九一)とある。『万葉集』の場合、「かの岡」が「この岡」、「男(をのこ)」が「小子(わらは)」、「な刈りそ」が「な刈りそね」となっている。歌意は、あの岡で草を刈る男よ、そんなに刈らないでくれ、このままにして、あの方がおいでになった時、お馬の飼葉にしようと思うのだ。作者に動作が予定されているためにかかわりのあるものに禁止の意を含みつつ懇ろに願ひ望む「な…そ」である。

用例九 七二七「むばたまの今宵な明けそ明けゆかば朝行く君を待つ苦しさに 人麿」(巻第八 雑上)

『万葉集』巻第十一に「烏玉是夜莫明朱引朝行公待苦」(二三八九)とあり、『万葉集』の場合、「むばたまの」が「烏玉」、「今宵」が「是夜」、「明けゆかば」が「朱引」となっている。暁の別れを詠んだ歌。待つ身のつらさを男に訴えている。歌意は、今夜は明けてくれるな、夜が明けてゆくと、朝に別れて帰って行く人を待つのはつらいので。「な…そ」は、作者に苦悩があるために、かわり

に挿せれどうつろひにけり つらゆき」とある。「瓶」に長寿の象徴である「亀」を掛けている。歌意は、いつまでも咲いていてほしい。はかなく散るなと思つて亀にかよう瓶にさしていたがその甲斐もなく散ってしまったよ。「散るな」の「な」は禁止を表わす終助詞。

用例一四 一〇五五「延喜御時、南殿に散り積みて侍ける花を見て 殿守の伴の御奴心あらばこの春許朝ぎよめすな 源公忠朝臣」
(巻第十六 雑春)

この歌は、『今昔物語集』巻第二十四では藤原敦忠の詠となつてゐる。歌意は、主殿寮の掃除にたずさわる者よ、もし風流の心があるならば、桜の花の美しく散り敷く今年の春の間だけは朝の庭掃除はしてくれるな、の意。「朝ぎよめすな」の「な」は懇願の気持ちを含めて禁止する用例である。作者は毎年咲く桜の花が例年になく美しく咲き、いつまでも賞美したいという落花への繊細な思いを詠んでいる。

まとめ

1 「終止形・な（終助詞）」

○懇願の気持ちを含めて禁止すると解されるもの

用例三・五・八・九 一四

五例

○禁止の意を表わすと解されるもの

用例一・二・四・六・七・一〇・一一・一二・一三

九例

2 作者は、大中臣能宣（用例一）、小式命婦（二）、小野宮太政大臣（三）、伊勢（四）、よみ人知らず（五・八 九・一〇）、貫之（六・一三）、輔相（七）、人麿（一一）、贈太政大臣（一二）、源公忠朝臣（一四）である。「よみ人知らず」が多い。

3 部立ては、春（用例一・二）、秋（三・四）、別（五・六）、物名（七）、雑（八・九・一〇）、恋（一一）、雑春（一二・一三・一四）と多岐にわたっている。

4 作者が懇願の気持ちを含めて禁止している対象は、「女郎花」（用例三）、別れを惜しむ人（五）、「鏡」（八）、「しのびて物言ひ侍ける女」（九）、「殿守の伴御奴」（一四）である。

二

「な（副詞）・連用形・そ（終助詞）」

歌

一一例

詞書

二例

用例一 一六「齋院御屏風に 香をとめて誰折らざらん梅花あやなし霞立ちな隠しそ 躬恒」（巻第一 春）

「あやなし」から「春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やは隠るる」（『古今和歌集』春上）を想起させる。用例の場合、霞が梅の花を隠す趣向を詠んでいる。一首は香りを求めてだれが手折らないことがあるうか、誰かに折り取られてしまうのだよ。この梅の花は隠しても意味のないことだ。霞よ、隠すようなことをするな。「な…そ」は禁止を表わす。

用例二 三八「天曆九年内裏歌合に 咲き咲かずよそにても見む山桜峰の白雲立ちな隠しそ よみ人知らず」（巻第一 春）

桜と白雲とを詠んだ歌に「山桜咲きぬる時は常よりも峰の白雲立ち増さりけり」（『後撰集』春下）がある。歌意は、花が咲いたかまだ咲いていないか、遠くからでも見ようと思う。だから、山桜の花を峰の白雲は隠さないでくれ、の意。この「な…そ」は作者に動作が予定されているために、かわりのあるものに禁止の意を含みつ

用例八 四六九「大江為基がもとに売りにまうで来たりける鏡の包みたりける紙に書きつけて侍ける 今日までと見るに涙のます鏡なれにし影を人に語るな よみ人知らず」(巻第八 雑上)

「ます鏡」は「真澄鏡」(澄み切った鏡)と「涙の増す」と掛ける。『古本説話集』上、『今昔物語集』『古今著聞集』等に発心譚として伝えられている。歌意は、手慣れたこの鏡も、今日を限りに手放すのかと思うと、涙がこみ上げてくるよ。鏡よ、映し慣れた姿を人に語らないでくれ。貧しくて鏡を売りに出した女性が鏡を包んだ薄紙に書きつけた歌と伝えられている。「人に語るな」の「な」は懇願の気持ちを含めて禁止する終助詞。

用例九 四七〇「橘の忠幹が人のむすめにしのびて物言ひ侍ける頃、遠き所にまかり侍とて、この女のもとに言ひ遣はしける 忘るなよ」(巻第八 雑上)

『伊勢物語』十一に「むかし、男、あづまへゆきけるに、友だちどもに、道よりいひおこせける。忘るなよ」は雲居になりぬとも空ゆく月のめぐりあふまで」とあり、「忘るな」と呼びかけている対象は「友だちども」になっている。逆接の仮定条件を形成する「とも」に心情が強く詠みこまれている。「廻あふ」に再会すると月の運行するを掛けている。歌意は、私のことは忘れないでくれ、二人の間はたとえ空遠くに隔たつていても、空を行く月が巡るように、また二人が再会するまで。「忘れるなよ」の「な」は、深い思いをもつ作者が懇願の気持ちをこめて禁止した用例である。

用例一〇 七〇九「夢よゆめ恋しき人に逢ひ見すな」(巻第八 雑上)

夢がさめて後の落胆を心配して詠んだ歌。禁止を表わす終助詞「な」は陳述の副詞「ゆめ」と呼応した場合、「決して」と強い禁止

になる。「夢」を擬人化して呼びかけている。歌意は、夢よ、決して恋しい人を夢の中で逢い見せるな。夢がさめた後はさびしくならないものだから。

用例一一 七五六「題知らず 思ふなと君は言へども逢ふ事をいつと知りてか我が恋ひざらん 人麿」(巻第十二 恋二)

『万葉集』巻第二に「柿本人麻呂の妻依羅娘、人麻呂と相別るる歌一首 な思ひと君は言へども逢はむ時いつと知りてか我が恋ひざらむ」(二四〇)とあり、再会の期待しがたい悲しみを訴えている。歌意は、思いつめるなど、あなたは言うけれども、逢うのがいつと分かっていたならばこれほどまでも恋しく思うことはないだろう。いつとわからないからこそ恋いせずにはいられません。「思ふな」の「な」は禁止を表す終助詞。

用例一二 一〇〇六「流され侍ける時、家の梅の花を見て 東風吹かばにほひをこせよ梅の花主なしとて春を忘るな 贈太政大臣」(巻第十六 雑春)

『大鏡』大臣列伝、左大臣時平の項で知られている流謫の名歌である。流布本系統の本には第五句は「春な忘れそ」となっている。歌意は、やがて春になり、東風が吹くころになったら、その風に託してなつかしい香を筑紫まで送っておくれ、梅の花よ。主人がいなからと言って梅の花の咲く春を忘れるなよ。「忘るな」の「な」は禁止を表わす終助詞である。

用例一三 一〇五四「故慶式部の親王の女、伊勢が腹に侍けるが、近き所に侍に、瓶に挿したる花を贈るとて 久しかれあだに散るなと桜花瓶に挿せれど移ろひにけり 貫之」(巻第十六 雑春)

『後撰和歌集』巻第三春下に「桜の花の瓶にさせりけるが散りけるを見て、中務につかはしける ひさしかれあだに散るなと桜花瓶

隠れて咲き匂っている桜の花よ、散り残っていると風に知られるな、の意。「知らるな」の「な」は終助詞で禁止を表わす。

用例三 一五八「くちなしの色をぞ頼む女郎花にめでつと人に語るな」小野宮太政大臣（巻第三 秋）

歌意は、くちなし色の、口無しというところを頼りにしている女郎花よ、女郎花の花の美しさに心ひかれてしまったのだと、他の人に話してくれるな。秘めごとを伏せておきたい気持ちを匂わせている。「語るな」の「な」は、懇願の気持ちを含めて禁止する用例である。

くちなしを詠んだ歌に「み、なしの山のくちなし得てし哉おもひの色のしたぞめにせむ」（『古今和歌集』雑体 よみ人しらず 一〇二六）・「山吹の花色衣ぬしやたれ問へど答へずくちなしにして」（『古今和歌集』雑体 素性法師 一〇一二）がある。いずれも「くちなし」を見ての連想である。

用例四 一六四「題知らず 秋の野の花の名立てに女郎花かりにのみ来む人に折らるな」伊勢（巻第三 秋）

女郎花の咲く秋の野に、狩のため立ち寄る光景を詠んだ歌。「かり」に「狩り」「仮」を掛けている。一首は、秋の野の花の名折れるから、女郎花よ、秋の野辺の狩りに来るような仮に立ち寄った人に折られるな、の意。「折らるな」の「な」は禁止の意を表わす終助詞である。

用例五 三〇六「題知らず 忘るなよ別れ路に生ふる葛の葉の秋風吹かば今帰り来む よみ人知らず」（巻第六 別）

歌意は、今や別れであるが忘れないでくれ。別れ路に生えている葛の葉が、秋風に裏返るように、秋風が吹く季節になったならば即座に帰って来よう。別れに際し「忘れないでほしい」という切々た

る心情を詠んだものと思われる。「忘るな」の「な」は懇願の気持ちを含めて禁止している。

「葛の葉」を詠んだ歌に「あき風の吹き裏がへす葛の葉のうらみても猶うらめしき哉」（『古今和歌集』恋歌五 平貞文 八二三）がある。この歌にあるように「葛の葉」は秋風が吹くと裏返ることから「帰り」にかかる。「今」は、即座に、の意である。この意で「今」を詠んだ歌に「立ち分かれいなばの山の峰に生ふるまつとし聞かば今帰り来む」（『古今和歌集』離別 在原行平 三六五）がある。

用例六 三一九「信濃の国に下りける人のもとに遣はしける 月影は飽かず見るとも更級の山の麓に長居すな君 貫之」（巻第六 別）

「更級の月」を詠んだ歌に「わが心なぐさめかねつ更級やをばすて山にてる月を見て」（『古今和歌集』雑上 八七八）がある。この歌の場合、心を和らげることのできない「月」であるが、用例六の「月」は見飽きることなく見てしまう名所の月である。一首の意は、月影は美しくたとえ飽きることなく見るといつても更級の山の麓に長居はするな、君よ。「長居すな」の「な」は禁止の意を表わす終助詞である。

用例七 四一〇「をしあゆ はしたかのをき餌にせんとかまへたるをしあゆかすな鼠とるべく 輔相」（巻第七 物名）

物名歌で四句の「をしあゆ」に「押鮎」（塩漬けにした鮎）を隠している。倒置法が使用してある。一首の意は、鷹狩りに用いるはしたかの餌にしようとして準備した招き餌捕りをゆり動かすな、呼び餌の鼠を捕ろうとしているのだから。「あゆかすな」の「な」は禁止を表わす終助詞。

の中をいではてやどるおくにも宿は有けり」(巻第二十・釈教歌)
 出家の生活に徹しえたと思つても、真の悟りの過程にすぎないのだ、まだ奥があると言つて導こうとする。歌意は、これが目ざす宿(究極の真理)と思うなよ。辛い浮世をまつたのがれ出て宿る所の奥にも、さらにゆくべき宿はまだあることだ。「な」は禁止の意を表わす終助詞。

まとめ

1 終止形・な(終助詞)

二五例

○懇願の気持ちを含めて禁止すると解されるもの

一六例

用例一・二・三・四・五・六・八・一一・一三・一五・一六・一七・二〇・二一・二二・二四

○禁止の意を表わすと解されるもの

九例

用例七・九・一〇・一二・一四・一八・一九・二三・二五

2 作者は、式子内親王(用例一・九)・摂政太政大臣(二・一〇)・花園左大臣室(三)・定家朝臣(四)・大藏卿行宗(五)・俊成(六・一二)・遊女妙(七)・素覚法師(八)・よみ人しらず(一一・一三・一八)・右大臣(一二)・正三位経家(一四)・伊勢(一五)・和泉式部(二六)・馬内侍(一七)・小侍従(一九)・家隆朝臣(二〇)・有家(二二)・慈鎮(二三・二五)・太上天皇(二四)

3 部立ては、春歌(用例一・二)・秋歌(三)・離別歌(四・五)・羈旅歌(六・七・八)・恋歌(九・一〇・一一・一二・一三・一四・一五・一六・一七・一八・一九・二〇)・雑歌(二一・二二)・神祇歌(二三・二四)・釈教歌(二五)である。懇願の気持ちを含めて禁止する用例は「恋歌」に多い。

4 作者が懇願の気持ちを含めて禁止している対象は、軒端の梅(用例二)・帰雁(二)・菊の花(三)・別れ行く人(四)・とをき国へまかりける人(五)・雄鳥のとまや(六)・世をいとふ人(七)・あすか川(八)・つげの枕(九)・初時雨(一〇)・つれなかりける女(一一)・袖の上(一二)をさふる袖(一三)・天の河瀬(一四)・忍びたる人(一五)・君(一六)・忍ぶ仲の人(一七・一八)・男(一九・二〇)・あまねき御代(二一)・月(二三)・七の社(二三)・神(二四)・出家の人(二五)である。

『拾遺和歌集』の禁止表現

一

「終止形・な(終助詞)」

歌

一四例

用例一 三一「匂をば風に添ふとも梅花色さへあやなあだに散らすな」大中臣能宣(巻第一 春)

春の象徴である花の香りを風に添わせる「花の香を風の便りにたぐへてぞ驚誘ふしるべには遣る」(『古今和歌集』春上 紀友則一三)と同じ趣向の歌である。梅の香りは風に連れ添わせてたとえ遠くに遣つてしまつても、梅の花の色までもわけもなくはかなく散らすな、の意で「散らすな」の「な」は終助詞で禁止を表わす。

用例二 六六「天曆御時歌合に あしひきの山隠れなる桜花散り残れりと風に知らるな」小式命婦(巻第一 春)

村上天皇の御代の歌である。春は過ぎて山に隠れた桜の花をいつまでも賞美しようという気持ちが詠まれている。一首は、深山に

用例一九 一二七七「題しらず つらきをも恨みぬわれにならふ
なようき身を知らぬ人もこそあれ 小侍従」(巻第十三 恋歌三)

本歌「いかばかり人のつらさを恨みまし憂き身のとがと思ひなさ
ずは」(『詞花集』恋歌上 賀茂成助 一九八)を背景に、男の仕打
ちに耐える苦しみと、女の心を動かすのに慣れている男への非難が
感じられる。歌意はあなたの薄情な仕打ちを恨まず耐えるわたしに
慣れなさいますな。冷淡にされるのは、自分の身ゆえだと知らない
女がいるかもしれません。「な」は禁止の意を表わす終助詞。

用例二〇 一二七九「忘るなよいまは心のかはるとも馴れしその
夜の有明の月 家隆朝臣」(巻第十四 恋歌四)

男に忘れられた女が有り明けの月の記憶でつながっていてほしい
という女の心での作。歌意は、忘れてくださいますな。今は心変わ
りしたとしても、慣れ親しんで共に過ごしたあの夜の有り明けの月
を。「な」を懇願の気持ちを含めて禁止したものと見ると、男への
未練、愛着を詠んだ歌となる。

用例二一 一四七八「千五百番歌合に 春の雨のあまねき御代を
たのむかな霜に枯れゆく草葉もらすな 有家朝臣」(巻第十六 雑
歌上)

「春の雨」は君の暖かいお恵み、「霜に枯れゆく草葉」は老い衰
えながらお恵みを待つ身の比喩。「もらす」は「雨」の縁語。歌意
は、春雨がすべてのものを潤すように帝のお恵みが広く行きわたる
御代を頼みにしているところです。霜に枯れてゆく草葉のように老
い衰えていくわたしをお見捨てならないでください。身分の低い者
から身分の高い者への禁止は懇願の気持ちを含めた用例になる。

用例二二 一五〇九「永治元年、讓位近くなりて、夜もすがら月
を見てよみ侍ける 忘れじよ忘るなとだにいひてまし雲井の月の心

ありせば 皇太后宮大夫俊成」(巻第十六 雑歌上)

崇徳天皇の讓位によって新帝(近衛天皇)の代となったら昇殿が
許されるかどうかかわからないので禁中に照る月に名残りを惜しんだ
歌。歌意は、わたしはこの月を忘れないであろう。月もわたしを忘
れてくれるなどだけでも言いたいものだ。宮中を照らすこの月が、
もし心があるとしたならば、の歌意。この「な」は、作者に苦悩が
あるために、かわりのあるものに対して禁止の意を含みつつ懇ろ
に願う望む用例である。

用例二三 一九〇二「述懐の心を わがたのむ七の社のゆふだす
きかけても六の道にかへすな」(巻第十九 神祇歌)

歌意は、わたしが信仰する日吉七社の神よ木綿襷をかけてお祈り
します。わたしを六道に決してもどさないでください。日吉七社の
神に祈った歌。「七」と「六」は数の縁語。「かけて」は木綿襷を
「かけて」と「かりそめにも。決して」の意の「かけても」を掛け
る。「な」は禁止を表わす終助詞。

用例二四 一九一一「熊野の本宮焼けて、年の内に遷宮侍しにま
いりて 契あればうれしきかゝるおりにあひぬ忘るな 神も行くすゑ
の空 太上天皇」(巻第十九 神祇歌)

歌意は、前世からの深い因縁があったので嬉しいこのような機会
にめぐりあいました。神もどうかこの因縁をわすれずにわたしの行
く末を御守りください。熊野坐神社が一二〇六年二月に炎上、十二
月に熊野御幸が行われた。社殿焼失という禍を福に転じようとする
祈りをこめた歌。切実な祈念の心情が詠み込まれている。「な」は
作者に切実な思いがあるためにかかわりのあるものに対して禁止の
意を含みつつ懇ろに願う望む用例である。

用例二五 一九四二「化城喻品 化作大城郭 おもふなよ憂き世

用例一三 一一二二「恋歌とてよめる　しのおあまりおつる涙を
堰きかへしをさふる袖ようき名もらすな　よみ人しらず」（巻第
十二 恋歌二）

歌意は、こらえかねて落ちる涙をしっかりと堰きとめて、涙を押さ
えている袖よ、恋をしているという浮名を漏らさないでくれ。「う
き名」に「憂き名」をかけている。「もらす」は「涙」の縁語。「枕
よりまた知る人もなき恋を涙堰きあへずもらしつるかな」（『古今集』
恋歌三・平貞文 六七〇）同様、切迫し、秘めた恋情が詠み込まれ
ている。禁止の意を含みつつ懇ろに願望を望む用例である。

用例一四 一一二九「隔河忍恋といふことを　しのびあまり天の
河瀬にことよせんせめては秋を忘れだにすな　正三位経家」（巻第
十二 恋歌二）

歌意は、恋心を秘めきれなくなり、牽牛・織女の逢うという天の
川の瀬にかこつけていおう。せめて秋に一度逢うことだけは忘れな
いでほしい。「せめて」「だに」にたびたび逢うことはできなくても
と言う哀切な響きが感じられる。「長恨歌」の世界を想起しながら、
禁止の意を含みつつ懇ろに願望を望む用例として鑑賞したい。

用例一五 一一五九「忍びたる人とふたりして　夢とても人にか
たるな知るといへば手枕ならぬ枕だにせず　伊勢」（巻第十三 恋
歌三）

歌意は、夢の中のこととしてでも、人にお話しなさないでくだ
さい。枕は二人の秘密を知るので手枕でない枕さえもしない
でいるのです。「夢」「枕」は縁語。「知るといへば枕だにせて寝し
ものを塵ならぬ名のそらに立つ覧」（『古今集』恋歌三伊勢 六七六）、
「わが恋を人知るらめやしきたへの枕のみこそ知らばしるらめ」
（『古今集』恋歌一 五〇四）等の類歌がある。作者に事象の展開が

予想できて、かわりのある対象に禁止の意を含みつつ懇ろに願
望む用例である。

用例一六 一一六〇「枕だに知らねばいはじ見しまゝに君かたる
なよ春の夜の夢　和泉式部」（巻第十三 恋歌三）

歌意は、枕さえも二人の恋は知らないのですから、人に話します
まい。ありのままに、君よ、人に語るなどということをなさらない
でください。春の夜の夢のような逢瀬を。「枕だに」の「だに」は
類推の意を表わす。「な」は作者に「秘めごと」の展開が予想でき
て、かわりのある対象に禁止の意を含みつつ懇ろに願望を望む用例
である。

用例一七 一一六一「忘れても人にかたるなうた、ねの夢見ての
ちもながからじよを　馬内侍」（巻第十三 恋歌三）

歌意は、決して人にお話しくださいますな。うたた寝に見た夢の
ようなはかない逢瀬の後いつまでも続く仲ではないでしょうから。
「うたたね」「夢」の縁語「夜」に、男女の仲の「世」を掛けている。
これも「忍ぶ仲の恋」歌と思われる。口外すると浮名が立ってしま
う。作者がかわりのあるものに禁止の意を含みつつ懇ろに願望を
望む用例である

用例一八 一一六五「題しらず　かりそめに伏見の野べの草枕露
か、りきと人にかたるな　読人しらず」（巻第十三 恋歌三）

第四句「か、り」に露が「かかる」意と「かくあり」の意を掛け
て、秘めごとの情景と口止めとを巧みに結んでいる。歌意は、ほん
のかりそめに伏見の野辺の草枕を結び、露が枕にかかりましたと他
の人に口外しないでください。「かりそめに」の「かり」と「刈り」
は掛詞。「かり（刈り）」「伏し」「草枕」「露」は縁語。「草枕」に呼
びかけている。「な」は禁止の意の終助詞。

「九七八 世中をいとふまでこそかたからめかりの宿りをおしむ
君かな 西行法師」の「返し」である。あなたは世を厭って出家な
さった人と聞きますのでわたしのような俗世そのままの宿に心をと
どめなさるなと思うばかりですよ、の歌意。「な」は禁止の意の終
助詞。西行説話の中では有名である。

用例八 九八六「泊瀬に詣でて帰さに、飛鳥川のほとりに宿りて
侍ける夜、よみ侍ける 故郷に帰らむことはあすか川わたらぬさき
に淵瀬たがふな 素覚法師」(巻第十 羈旅歌)

なつかしい故郷へ帰るのは明日のことであろうか。飛鳥川よ、わ
たしが渡らないうちに淵瀬を変えないでくれ、の歌意。本歌「世の
中はなにか常なる飛鳥川きのふの淵ぞけふは瀬になる」(古今集・
雑下・読人しらず)を背景に、淵瀬を変えて渡れなくしてくるな
と詠んだ歌。作者にはっきり動作が予定されているために、かわ
りのある対象に禁止の意を含みつつ懇ろに願望む用例である。

用例九 一〇三六「わが恋は知る人もなし堰く床の涙もらすなつ
げのを枕 式子内親王」(巻第十一 恋歌一)

私の恋心はまだ誰も知っていない。堰きとめている私の涙を漏ら
さないでくれ、黄楊の枕よ、の意。「わが恋を人知るらめや敷妙の
枕のみこそ知らば知るらめ」(古今 恋歌一 五〇四)、「枕よりま
た知る人もなき恋を涙堰きあへず漏らしつるかな」(古今 恋歌三
平貞文 六七〇)の歌を背景に、私の恋を「黄楊の枕」が知ってい
るとして、「漏らすな」と訴えたと思われる。作者に秘めた心情が
あるためにかかわりのあるものに対して禁止の意を含みつつ願望
む用法である。

用例一〇 一〇八七「左大将に侍ける時、家に百首歌合し侍ける
に、忍恋の心を もらすなよ雲ある峰の初時雨木の葉は下に色かは

るとも 摂政太政大臣」(巻第十二 恋歌二)

人に知らせるなよ。雲のかかっている峰に降る初しぐれよ、木の
葉は雲の下でひそかに色づいているとしても、の歌意。上の句は、
時雨に呼びかけ、下の句は袖がひそかに染まることを詠んでいる。

「な」は禁止の意の終助詞。「雲ある峰」は深く秘めた恋を、「初時
雨」は恋の涙を、「木の葉は下に色かはるとも」は、嘆きの涙で袖
の色が変わってもを、それぞれ暗示していると言われている。

用例一一 一一〇三「大納言成通文つかはしけれどつれなかりけ
る女を、後の世まで恨み残るべきよし申ければ 玉章のかよふばか
りになくさめて後の世までの恨みのこすな よみ人しらず」(巻第
十二 恋歌二)

歌意は、手紙のやりとりをするだけで心を慰めて来世まで恨みを
残さないでください、である。相手の恋情を受け入れられない女か
らの返歌。なんとかして文通だけで慰めてほしいという気持ちがあ
るため、相手に禁止の意を含みつつ懇ろに願望む用例と読めば、情
愛あふれた歌になる。

用例一二 一一一一「入道前関白右大臣に侍ける時、百首歌の中
に忍ぶる恋 ちらすなよしのの葉ぐさのかりにても露かゝるべき袖
の上かは」(巻第十二 恋歌二)

歌意は、涙の露を散らすなよ、しのの葉ぐさを刈るではないが仮
にも露がかかってもよい袖の上であろうか、いやそうではなからう。
「袖の上」の「露」は秘めた恋の悲しみの涙である。涙を落とせば
恋する心はすぐに人に見とがめられる。涙を人に見せてはならぬ、
の心をわが袖に言い聞かせた歌。「ちる」は「露」の縁語。「刈り」
は「仮(かり)」の懸詞。「な」な禁止の意を表わす終助詞。

『新古今和歌集』の禁止表現

「終止形・な（終助詞）」

歌

二五例

用例一 五二「百首歌たてまつりしに、春歌 ながめつるけふは昔になりぬとも軒端の梅はわれをわするな」
式子内親王」（巻第一 春歌上）

もの思いをしながらじつと見入っていた今日という日が昔になつてしまつても軒端の梅だけは私を忘れてくれるな、の意。この「な」は、「こち吹かばにはひおこせよ梅の花あるじなしとて春を忘るな」（『拾遺和歌集』雑春 菅原道真）、「今はとて宿離れぬともなれきつる真木の柱はわれを忘るな」（『源氏物語』真木柱）の「…な」に通う。「梅の花」に、懇願の気持ちを含めて禁止している。

用例二 六一「帰雁を わするなよたのむの沢をたつ雁も稲葉の風の秋の夕暮 摂政太政大臣」（巻第一 春歌上）

北へ帰る雁に哀感を込めて「わするなよ」と呼びかけている。雁よ、田の面の沢を飛び立つても稲葉に風の吹きわたる秋の夕暮れを忘れないで思い出してくれ、の意。懇願の気持ちを含めて禁止している用例である。「帰雁を、よめる はるがすみたつを見すててゆくかりは花なき里に住みやならへる 伊勢」（『古今和歌集』春歌上三一）も帰雁を詠んだ歌である。

用例三 五〇八「鳥羽院御時、内裏より菊をめしけるに、たてまつるとて結びつけ侍ける 九重にうつろひぬとも菊の花もとのまがきを思ひわするな」
花園左大臣室」（巻第五 秋歌下）

鳥羽院の御代、内裏から菊をお召しになった時に、さしあげるといので結びつけた歌である。たとい宮中に移し植えられても、菊の花よ、もとのこの籬を忘れないでほしい、の意。「菊」は擬人化さ

れている。「な」は懇願的な気持ちを含めて禁止している用例である。

用例四 八九一「わするなよ宿る袂はかはるともかたみにしほるよはの月かけ 定家朝臣」（巻第九 離別歌）

友との別れの歌とも、男女の別れの歌ともとれる。月の夜の別れの情景。歌意は、忘れないでくれよ、たとえ月の宿る袂は変わつても互いに形見としてしほりあう袂に宿る今夜の月を、である。「わするな」に作者の別れを惜しむ切実な心情が詠み込まれている。「な」は懇願の気持ちを含めて禁止する用例である。

用例五 八九四「とをき国へまかりける人につかはしける 別れ路は雲井になりぬともそなたの風のたよりすぐすな」
大藏卿行宗」（巻第九 離別歌）

遠い国へ下った人に贈った歌である。別れていく旅先はたとい遠い雲の彼方になつてしまつても、どうかそちらから風の便りを送ることを忘れないでください、の意。「雲」「風」は縁語。この「な」は、作者に関係のある動作が予想できて、さらに、禁止の意を含みつつ心情的に懇ろに願望む用例である。

用例六 九三三「たちかへり又もきて見ん松島や雄島のとまや浪にあらずな」
皇太后宮大夫俊成」（巻第十 羈旅歌）

立ち戻つてふたたび来て見よう。その時まで待っていてくれるだろうか。この松島の雄島の苦屋を波で荒れさせないでほしい、の歌意。松島の雄島の苦屋で過ごした旅寝の情緒を思つて再び訪れたいという心境を述べた歌。「たち」も「かへり」も「浪」の縁語。作者に事象の展開が予想できて、心情的に禁止の意を含みつつ懇ろに願望む用例である。

用例七 九七九「返し 世をいとふ人としきけばかりの宿に心とむなと思ふばかりぞ 遊女妙」（巻第十 羈旅歌）

しもせじ白珠を恋ふるをだにもかたみと思はむ」がある。作者が相手に忘れられることを懸念した歌である。漁師が住吉は住みよい所だとたとえ知らせても長居してはいけません。住吉に人を忘れるという忘れ草が生えているということですが、という歌意。「ながゐすな」の「な」な禁止の意の終助詞。

用例一〇 一〇九四「相模歌 ころぎの磯たちならし磯葉つむめざし濡らすな沖にをれ浪」(巻第二十 東歌)

沖の浪に呼びかけた歌である。この後、常陸歌、甲斐歌、伊勢歌と続く。歌意は、ころぎの岩の多い浜辺を動き回って、磯葉草を摘む少女を濡らしてはいけません、浪は沖にいなさいの意。「濡らすな」の「な」は強い禁止を表わす終助詞である。

墨滅歌 一一〇八「恋しくは下にを思へ紫の下 犬上のとこの山なるなとり河いさと答へよわが名もらすな」この歌、ある人、天帝の、近江采女に給へると」(巻第十三 墨滅歌)

詞書「恋しくは下に思へ紫の下」は「恋しくはしたにおもへ紫の根摺の衣色に出づなゆめ」の歌の次にあつたの意。『万葉集』二七一〇に「狗上之鳥籠山有不知也河不知二五寸許瀬余名告奈」がある。四八七にも「不知也川」が詠まれている。「とこ」に「床」と「とこ」(の山)を掛けている。歌意は、名を取るという名取川でもないのに、床入りしたと言われそうだよ、世間の人には「いさ(知らず)」と答えよ、わたくしの名を漏らさないように、の意。「もらすな」の「な」は禁止の意を表わす終助詞。

まとめ

1 「終止形・な(終助詞)」

墨滅歌

一〇例

一例

○懇願の気持ちを含めて禁止すると解されるもの 六例
用例三・四・五・六・七・八・

作者に深く切々たる思い(三)、苦悩(四・五・六・七・八)等があるために、かわりのあるものに対して制止の意を含みつづ懇ろに願望む用例である。

○禁止の意を表わすと解されるもの

五例

用例一・二・九・一〇・墨滅歌

2 作者は、読人しらず(用例一・四・五・七・八)・僧正遍昭(二)・貫之(三)・躬恒(六)・壬生忠岑(九)・相模歌(一〇)・ある人(墨滅歌)。

3 部立ては、夏(用例一)・秋(二)・離別(三)・恋(四・五・六・七・八)・雑(九)・東歌・相模歌(一〇)・物名(墨滅歌)である。

作者の深く切々たる思い、苦悩等があるために、かわりのあるものに対して禁止の意を含みつづ懇ろに願望む用例は「恋」の歌に多い。

4 作者が懇願の気持ちを含めて禁止している対象は、ほととぎす(用例一)・をみなえし(二)・陸奥国へまかりける人(三)・人目を忍ぶ恋の相手(四・五・六・七・八)で、「忍ぶ恋の相手」が多い。

昭和五〇年に、古今集」の「な：そ」一五例を読み進めている時に「：な」にも「懇願的な禁止を含む」の歌があると思った。今回、読んでみて「：な」を単なる禁止と読解しない方が深い読みにつながると思った。

(巻第八 離別歌)

白雲が幾重にも重なる遠い辺の地にいても、あなたのことを思っているわたしに対して心を隔てないでくださいの意。陸奥にゆく人に自分の思いを懇願的に述べた歌である。作者に別離の思いがあるために、かわりのある者に対して禁止の意を含みつつ、懇ろに願う望む用例である。

用例四 六四九「君が名もわが名も立てじ難波なる見つともいふなあひきともいはじ」(巻第十三 恋歌三)

人目を忍ぶ恋の歌である。「見つ」「あひき」は懸詞である。歌意は、あなたの名も私の名も世間には立てますまい、難波にある「御津」のあたりでは魚取りをしている網引きの声が聞こえるでしょうが、そのように世間に聞こえないようにわたくしに逢っていると言わないでください、である。直接経験を表現する助動詞「き」がきいて、「な」の懇願的禁止の意が明瞭になり、人目を忍ぶ恋の苦悩が第四句にはっきり見られる。

用例五 六五二「恋しくはしたにをおもへ紫の根摺の衣色に出づなゆめ よみ人しらず」(巻第十三 恋歌三)

恋しいならば心のうちで思いなさい。紫草の根で染める衣の鮮やかな色のように、外に動作でお出しなさいますな、決して一日につかないでください、の意。副詞「ゆめ」が終助詞「な」と呼応して、人目を忍ぶ恋を懇願の気持ちこめて強く禁止している。なお、「したに」の意を「を」は強めている。

用例六 六六二「題しらず 冬の池に住む鳩鳥のつれもなくそこにかよふと人にしらすな 躬恒」(巻第十三 恋歌三)

「つれもなく」は、連れがないの意と無関係の意、「そこ」は「底」と「其処」の懸詞、「池」「鳩鳥」「底」は「水」の縁語。懸詞

縁語の修辭法を駆使して人目を忍ぶ恋の苦悩を述べている。歌意は、冬の池に住む鳩鳥が連れ合いもなく、ひそかに「そこ」に通っていると人に知らせないでください、である。終助詞「な」は懇願の気持ちを含めてかわりのある者に対して禁止している用例である。

用例七 七〇三「夏引きの手びきの糸をくりかへし事しげくとも絶えむとおもふな」この歌は、返しによりて奉りけるとなむ よみ人しらず」(巻第十四 恋歌四)

「くりかへし」はたぐり出す意と反復する意、「しげく」は密集している意と噂が多いの意、「絶え」は糸が切れるの意と恋仲が切れる意の懸詞。歌意は、世間で恋仲の噂がたとえ高くてもわたしとの恋仲が絶えるだろうと思わないでください。逆接の仮定条件「とも」も効果的である。「な」は懇願の気持ちを含めて禁止している終助詞である。

用例八 七一九「題しらず 忘なむ我をうらむな郭公人の秋には逢はむともせず よみ人しらず」(巻第十四 恋歌四)

「忘れなむ」の「な」に強い気持ちが表れている。「秋」に「飽き」を掛けている。一首の意は「きつと忘れてしましましょう、わたくしを恨んでくださいますな。夏に鳴く郭公も秋を待たないで山に帰ります。わたしも人の心のあきには会おうとは思いません」の意。「うらむな」の「な」は「忘れてしまつても」恨んでくださいますな」とかわりのある者に懇願的に禁止している終助詞である。

用例九 九一七「あひ知れりける人の、住吉にまうでけるに、よみて、遣はしける 住吉と海人は告ぐともながあすな人忘草おふといふなり 壬生忠岑」(巻第十七 雑歌上)

「住吉」は地名の「住吉」と「住み好し」を、「ながあ」は「長居」と地名の「ながあ」掛けている。『土佐日記』に「忘れ貝拾ひ

『古今和歌集』・『新古今和歌集』の禁止表現（「…な」） 『拾遺和歌集』の禁止表現（「…な」）・「な…そ」

田 中 司 郎

はじめに

日本古典文学の禁止表現（「…な」・「な…そ」）を把握する過程で八代集の禁止表現の用例の収集と検討を試みてきた。『古今和歌集』の（「…な」）、『新古今和歌集』の（「…な」）、『拾遺和歌集』の「詞花和歌集」（「…な」）、「な…そ」が手付かずの状態であったので、今回、『古今和歌集』『新古今和歌集』（「…な」）、『拾遺和歌集』（「…な」）、「な…そ」の禁止表現を検討して、歌、詞書の中に述べてある時代、場所、登場人物の対人関係、呼びかけている対象、部立て等を確かめながら和歌の読みを深めたい。歌番号は『新編国歌大観』に従う。

『古今和歌集』の禁止表現

「終止形・な（終助詞）」

歌

用例一 二五二「題しらず いまさらに山へ帰るなほと、ぎすこ

〇例

ゑのかぎりわが宿になけ よみ人しらず」（卷第三 夏歌）
今、ことさらに山へ帰るな、ほととぎすよ。鳴き声の続く限り精一杯、私の家のあたりで鳴いてくれ、せっかく山から出てきたのだから、の意。命令形「なけ」は願望の用法である。山から出て来て鳴くとされたほととぎすに呼びかけた歌である。「帰るな」の「な」はかたく禁止する終助詞である。

用例二 二二六「題しらず 名にめでておれる許ぞをみなへし我
おちにきと人にかたるな 僧正遍昭」（卷第四 秋歌上）

名前の魅力にひかれて折っただけのことだ。女郎花よ、わたしが墮落したと人に言うな、の意。「な」は禁止の終助詞である。仮名序に「僧正遍昭は、歌の様は得たれども、誠少なし。たとえば、絵に描ける女を見て、徒らに心を動かすがごとし」とあるのはつとに知られている。この例歌としてあげた古注に「嵯峨野にて馬より落ちてよめる」と詞書にある。

用例三 三八〇「陸奥国へまかりける人に、よみて、遣はしける
白雲の八重にかさなる遠方にてもおもはむ人に心隔つな 貫之」